

おおかみと七ひきのこどもやぎ

グリム兄弟
楠山正雄 訳
(出典：青空文庫)

一

むかし、あるところに、おかあさんのやぎがいました。このおかあさんやぎには、かわいいこどもやぎが七ひきあって、それをかわいがることは、人間のおかあさんが、そのこどもをかわいがるのと、すこしもちがったところはありませんでした。

ある日、おかあさんやぎは、こどもたちのたべものをとりに森まで出かけて行くので、七ひきのこどもやぎをよんで、こういいきかせました。「おまえたちについておくがね、かあさんが森へ行ってくるあいだ、気をつけてよくおるすばんしてね、けっしておおかみをうちへ入れてはならないよ。あいつは、おまえたちのこらず、まるのまんま、それこそ皮も毛もあまさずたべてしまうだよ。あのわるものは、わからせまいとして、ときどき、すがたをかえてやってくるけれど、なあに、声はしゃがれて、がらがあごえだし、足はまっ黒だし、すぐと見わけはつくのだからね。」

すると、こどもやぎは、声をそろえて、「かあさん、だいじょうぶ、あたいたち、よく気をつけて、おるすばんしますから、心配しないで行っておいでなさい。」と、いいました。

そこで、おかあさんやぎは、メエ、メエといって、安心して出かけて行きました。

二

やがて、まもなく、たれか、おもての戸をとんとたたくものがありました。そうして、「さあ、こどもたち、あけておくれ、おかあさんだよ。めいめいに、いいおみやげをもって来たのだよ。」と、よびました。

でも、こどもやぎは、それがしゃがれた、がらがあ声なので、すぐおおかみだということがわかりました。そこで、「あけてやらない。おかあさんじゃないから。おかあさんは、きれいな、いい声してるけれど、おまえはしゃがれっ声《ごえ》のがらがあ声だもの。おまえはおおかみだい。」と、さげびました。

そこで、おおかみは、荒物屋《あらものや》の店へ出かけて、大きな白《はく》ぼくを一本買って来て、それをたべて、声をよくしました。それからまたもどってきて、戸をたたいて、大きな声で、

三

それから間もなく、おかあさんやぎは、森からかえて来ました。ところで、まあ、おかあさんやぎは、そのときなを見たでしょう。おもての戸は、いっぱいにあげひろげてありました。テーブルも、いすも、腰かけも、ほうりだされていました。洗面《せんめん》だらいは、こごごなにこわれていました。夜着《よぎ》もまくらも、寝台《しんだい》からころげおちていました。

おかあさんやぎは、こどもたちをさがしましたが、ひとりもみつかりません。ひとりひとり、名前をよんでも、たれも返事《へんじ》をするものがありません。おしまいに、いちばん下の子の名前まで来て、はじめて、ほそい声で、「かあさん、あたい、時計のお箱にくれているよ。」というのが、きこえました。

おかあさんやぎは、この子をひっぱりだしてやりました。そこで、この子の口から、はじめておおかみが来て、ほかのこどもたちみんなたべてしまったことが、わかりました。そのとき、おかあさんやぎは、かわいそうな子やぎたちのことを、どんなに泣いてかなしんだか、みなさん、さっしてみてください。

やっこのことで、おかあさんやぎは、泣くことをやめて、末《すえ》っ子やぎといっしょに、そとへ出ました。原っぱまでくると、おおかみは、やはり木のかげにながながとねそべって、それこそ木の枝も葉も、ぶるぶるふるい動くほどの高いびきを立てていました。

ところで、おかあさんやぎが、おおかみのようすを遠くからよく見ますと、そのふくれかえったおなかの中で、なにかもそもそ動いているのがわかりました。「まあ、ありがたい、おおかみのやつ、うちのこどもたちを、お夕飯《ゆうはん》にして、うのみにのみこんだままだから、みんなきつとまだ生きているだよ。」

こうおもって、おかあさんやぎは、さっそく、うちへかけこんで行って、はさみと針と糸をとって来ました。それから、おかあさんやぎは、このばけものどてっ腹を、ちょきんとはさきで、ひとはさみはさみました。するともうそこに、一びきのこどもやぎが、びよこんとあたまを出しました。おかあさんはよろこんで、またじよきじよきはさんで行きますと、ひとり出《で》、ふたり出して、とうとう六びきのこどもやぎのこらずが、とびだしました。みんなぶじて、たれひとり、けがひとつしたものありません。なにしろ、この大ばけものは、むやみとがつがつしていて、ただもう、ぐっく、ぐっく、そのまま、のどのおくへほうりこんでしまっていたからです。

まあうれしいこと。こどもたちは、おかあさんやぎにしっかりだきつきました。それから、おゆめさんをもらう式の日、お立屋のように、びよんびよんはねまわりました。

でも、おかあさんやぎは、こどもたちをとめて、「さあ、そこらで、みんな行って、ごろた石をひろっておいで、この間《ばち》あたりなけだものが寝《ね》ているうちに、おなかにつめてやるのだから。」といいました。

「さあ、こどもたち、あけておくれ。おかあさんだよ、みんなにいいものをもって来たのだよ。」と、どなりました。

でも、おおかみはまっ黒な前足を、窓のところにかけていたので、こやぎたちはそれを見つけて、

「あけてはやらない。うちのおかあさんは、おまえのようなまっ黒な足をしていない。おまえはおおかみだい。」と、さげびました。

そこで、おおかみは、パン屋の店へ出かけて、

「けつまづいて足をいためたから、ねり粉をなすっておくれ。」と、いいました。

で、パン屋が、おおかみの前足にねったこなをなすってやりますと、こんどは、粉屋《こなや》へかけつけて行って、

「おい、前足に白いこなをふりかけてくれ。」と、いいました。

「おおかみのやつ、まただれかだますつもりだな。」

そう粉屋はおもって、ぐずぐずしていました。

するとおおかみは、

「すぐしないと、くっちまうぞ。」と、どなりました。

そこで、粉屋はこわくなって、おおかみの前足を白くしてやりました。まあ、こういうところが、人間のだめなところですね。

さて、わるものは、三どめに、やぎのおうちの戸口に立って、とんとん、戸をたたいて、こういいました。

「さあこどもたちや、あけておくれ、おかあさんがかえて来たのだよ、おまえたちめいめに、森でいいものをみつけて来たのだよ。」

子やぎたちは、声をそろえて、

「さきに足をおみせ、うちのおかあさんかどうだか、みてやるから。」

そういわれて、おおかみは、前足を窓にのせました。こどもやぎがそれを見ますと、白かったので、おおかみのいうことを、すっかりほんとうにして、戸をあけました。

ところで、はいつて来たのはたれでしよう、おおかみだったではありませんか。

みんな、わあっとおどろいて、ふるえあがって、てんでんにかくれ場所をさがして、かくれようとなりました。ひとりは、つくえの下にとびこみました。次は寝床《ねどこ》にはいこみました。三ばんめは、炬《ろう》の中にかくれました。四ばんめは、台所《だいどころ》へにげました。五ばんめは、棚《たな》にあらがりました。六ばんめは、洗面《せんめん》だらいの下にもぐりました。七ばんめは、柱時計の箱のなかにかくれました。

ところが、おおかみは、そばからみつけだして、ぞうきなく、ひとりひとり、かたはしからつかまえて、ただひと口に、あんぐりやってしまいました。ただ、大時計の箱のなかにかくれた、いちばん小さな子だけは、みつからずにすみました。さて、たらふくたべたいだけたべて、おなががくちくになると、おおかみはおもてへにげ出して、木のかげになって、青あおとしているしばの上に、ながながとねそべって、ぐうぐういびきをかきだしました。

そこで、こどもたちは、われがちにかけだして行って、えんやら、えんやら、ごろた石をあつめて、ひきずって来ました。そうして、それを、おおかみのおなかに、つまるだけつめこみました。すると、おかあさんやぎが、あとから、ちょっちょっと、手ばしこく、もとのようにぬいつけてしまいました。それがいかにも早かったので、おおかみがまるで気がつかないし、ごそりもしないまにすんでしまいました。

おおかみは、やっこのこと、寝《ね》たいだけ寝て、立ちあがりました。なにしろ、胃袋《いぶくろ》のなかは石がいっぱいで、のどがからからにかわいてたまらないので、ふき井戸のところへ行って、水をもうとしました。ところが、からだを動かしかけますと、おなかの中で、ごろた石がぶつかりあって、がらがら、ごろごろ、いいました。

がらがら、ごろごろ、なにがなる

そりゃどこでなる、腹《はら》でなる。

六びきこやぎのなくこえか、

こりゃ、そうじゃない、ごろた石、

おおかみは、こうたいました。

さて、やっここすつこ、ふき井戸の所まで来て、水の上にかがもうとすると、おなかの石のおもみに引かれて、おおかみは、のめりました。そうして、いやおうなしに、泣き泣きおおかみは、水の中におちこみました。

遠くで見えていた七ひきのこどもやぎは、みんなかけよって来て、

「おおかみ死んだよ。おおかみ死んだよ。」とさげびながら、おかあさんやぎと手をつなぎながら、おおよろこびで、井戸のまわりをおどりまわりました。